

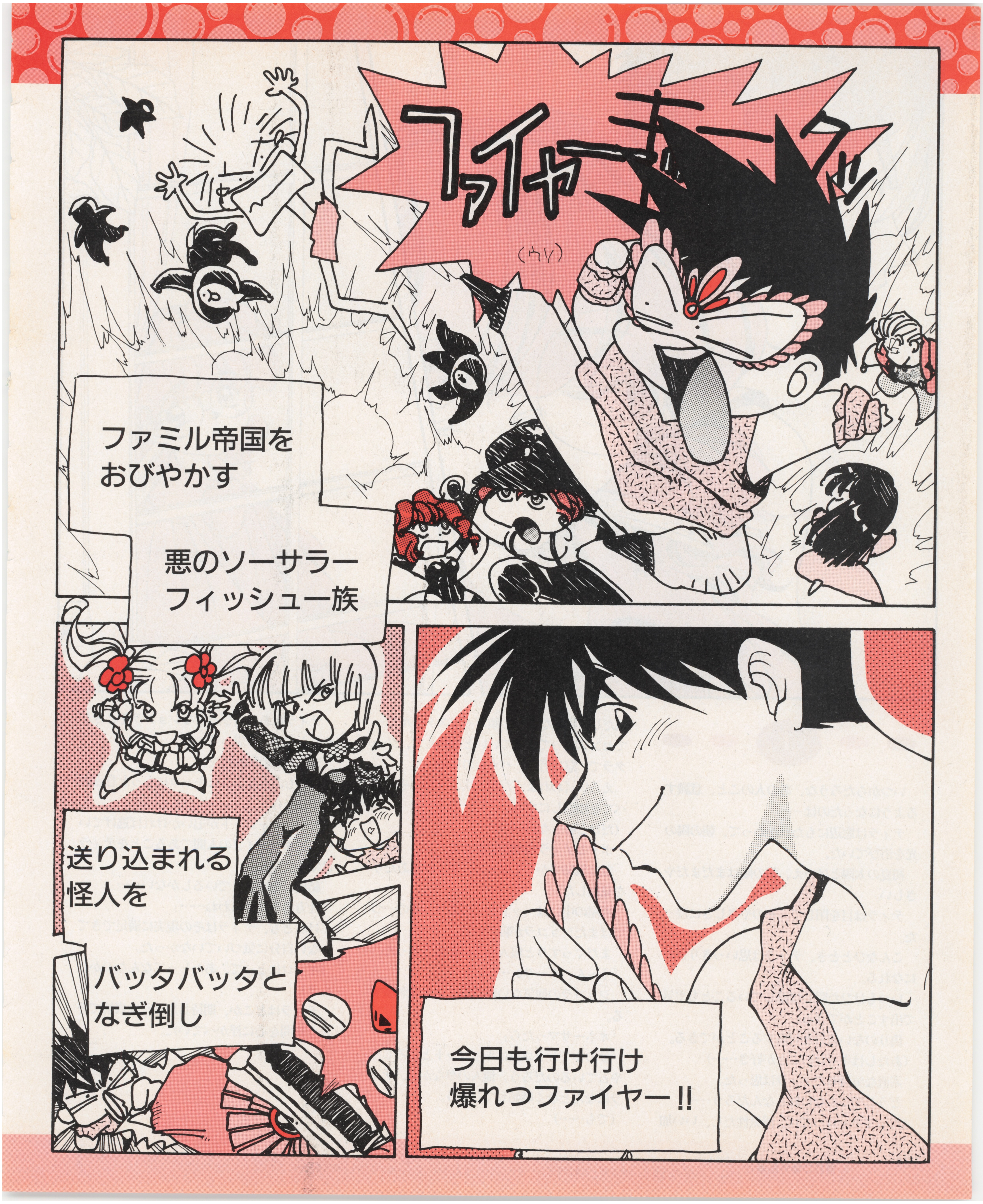
読者参加G（ゲーム）ノベル

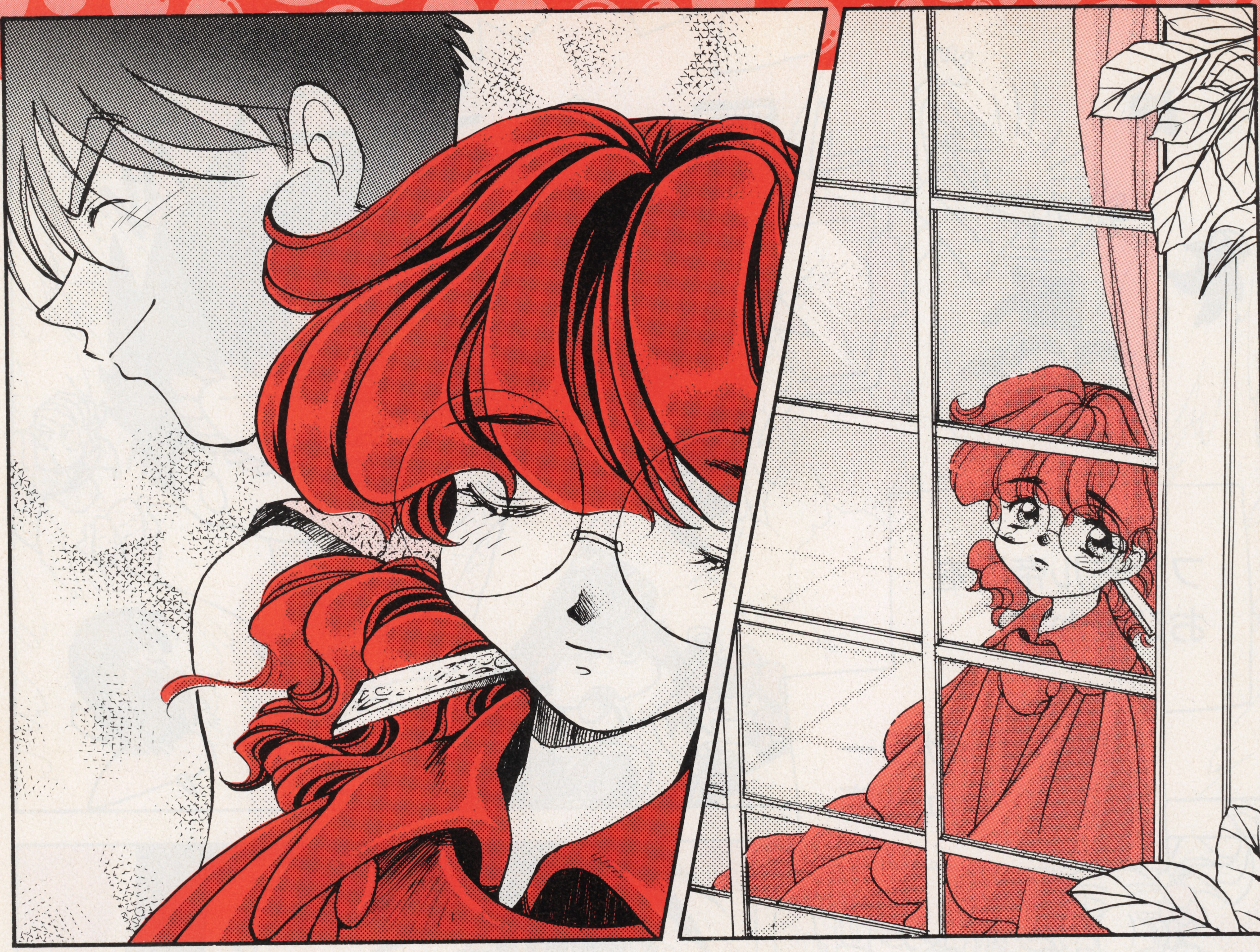
ティラ・ミスの
想（おも）いはどこへ……

第3話
初夏の出逢いは唐突に!?

爆れつハンター Special

あかほりさとる
イラスト／臣士れい


ファイヤーキーック
(ウリ)
ファミル帝国を
おびやかす
悪のソーサラー
フィッシュー族
送り込まれる
怪人を
バッタバッタと
なぎ倒し
今日も行け行け
爆れつファイヤー!!



1

いつからだろうな、あの人のこと、意識するようになったのは——

ティラは窓辺にもたれかかって、朝の陽の光を浴びていた。

初夏の太陽とはいえ、朝の陽はまだまだやさしい。

ティラは目を閉じて、そのやさしさに浸った。

こんなひととき、ティラは思いっきり正直になれる。

いつもはひた隠しに隠していることも平気で出すことができる。

偽りのない自分と対面することができる。

(あたしはキャロのことが好き……)

素直な気持ちでティラは思った。

どうしてこんなに好きなんだろう——

(だってキャロってば、浮気性だし、いい加減だし、根性ないし、顔だってスタイルだってセンスだって決していいとはいえず、グータラで、怠け者で、バカなのに……)

えらい言われようだが、次の一言がそのすべてを帳消しにする。

(だけど好きなの……)

ポッとティラの頬が赤らんだ。

急に気恥ずかしくなって、ティラはあたりを見回した。

部屋の中にはベッドが二つあり、その一つではまだショコラが寝ている。

まだぐっすりと寝入っているようだった。

「う〜ん、ダーリン……」

ショコラの何気ない寝言がティラを刺激する。

「オネーサマったら」

夢の中でショコラはキャロットとよろしくやっているのだろう。他人の夢ながら、ティラはなんとなく嫉妬してしまう。

(でも……)

ティラはあけっぴろげなショコラをときどきうらやましく思っていた。

ショコラの積極性を。

自分もあんなふうにキャロにもっと意志表示できたら——

だが、キャロットが追いかければ逃げていってしまうタイプの人間であることをティラは知っていた。

結局、今のままでいるしかない——

「仕方ありませんわね……」

けれども、ティラはその現実に満足できていない自分に気づいていなかった。

(キャロにとって、あたしってなんなのかしら？)

ティラはどこか、期待したような表情でそんな疑問を心に浮かべていた。

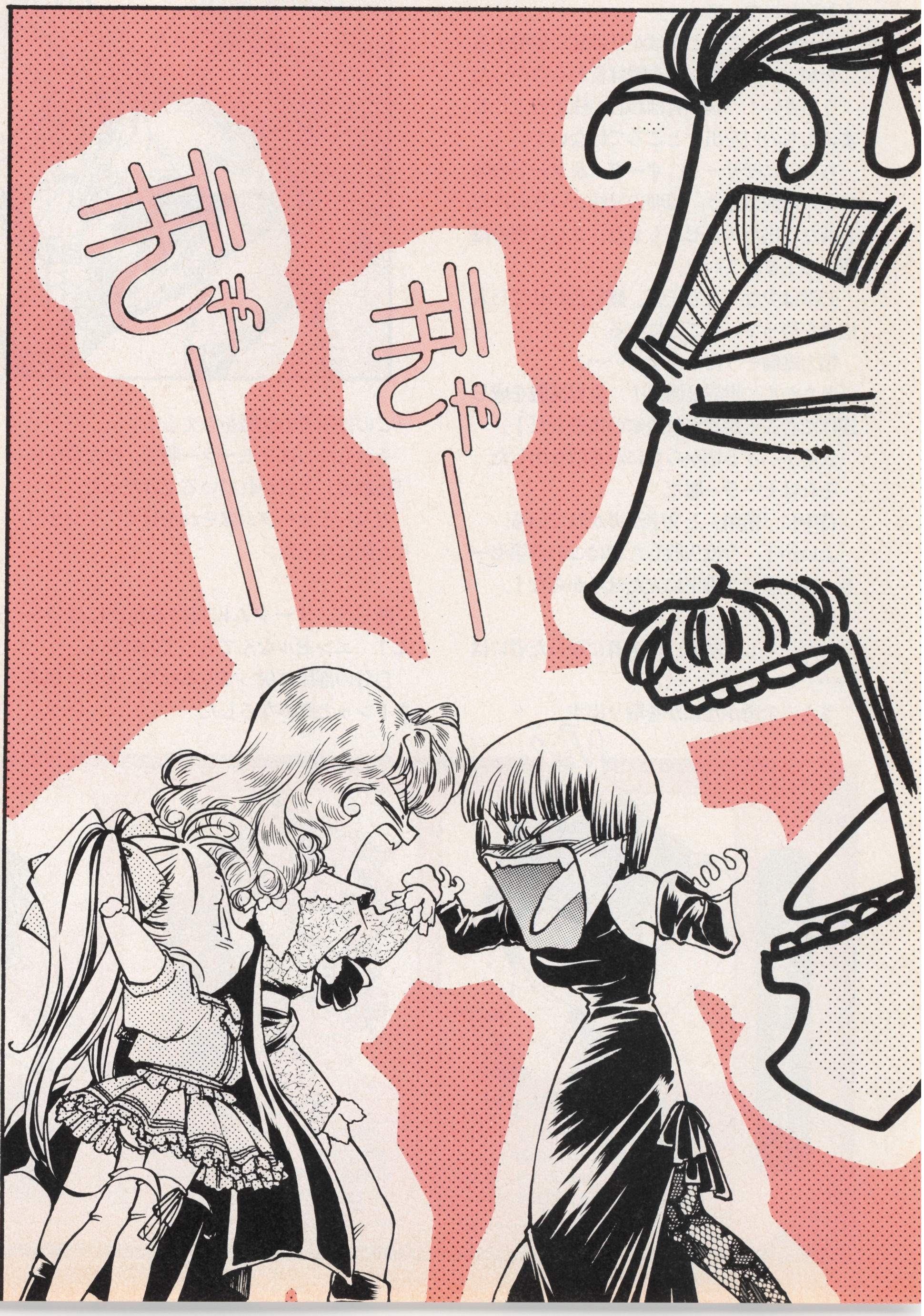
爆れつ場外乱暴!! 前置きはいっさいなし！ さぁ今月もダジャレコーナーいってみよう!! 「箸と茶碗の会話。"あ、どうもハシめまして""気安くチャワンないでよ!!"どうだ、くだらんだろう!!」(愛知県・光画部部長) ギャハハッ、くだらねーぞー。まさに今月1発目を飾るにふさわしいくだらなさだ!!

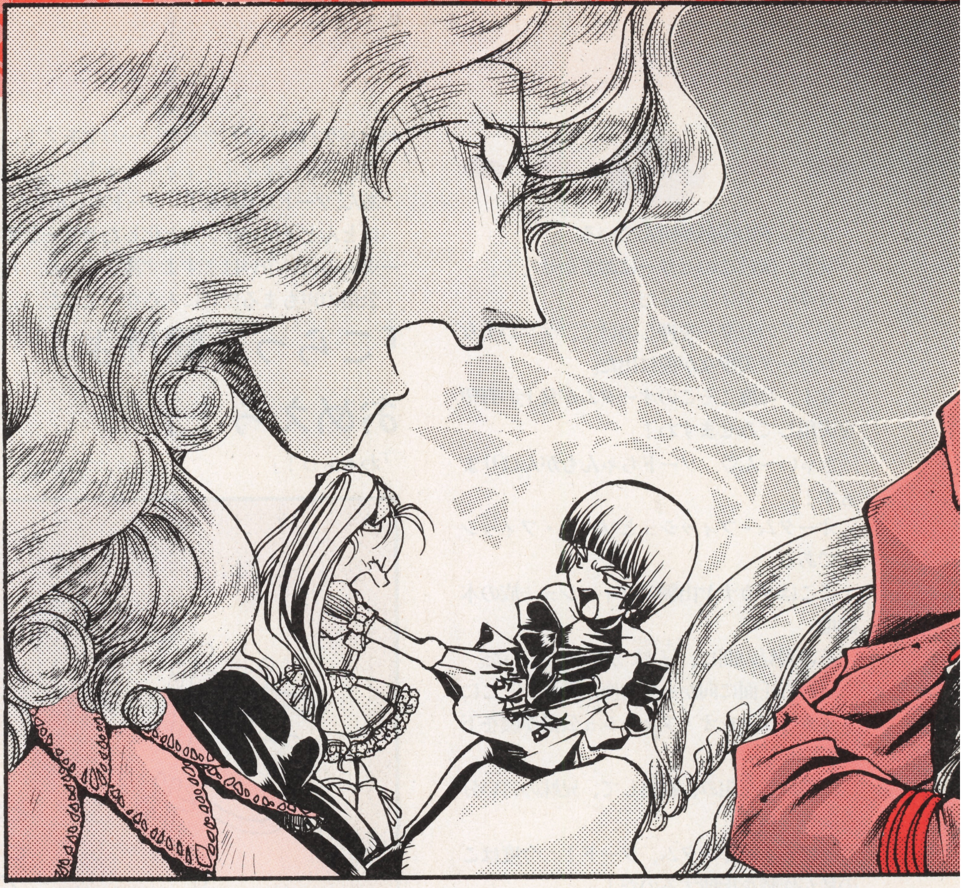
2

ブロンドの美形が叫んでいる。
「父上、次はこのゼリーにおまかせを！」
ゼリー・フィッシュだ。
が、そのゼリーを押しのけて、ケバい美女とロリータ美少女が前に出た。
「父上、今度こそこのオータムが父上の野望を実現してみせますわ！」
「きゃい〜ん♡　ソードちゃんもがんばりまぁす！」
オータム・フィッシュとソード・フィッシュである。
ここはサカナヤ山脈のフィッシュ一族の本拠地。
その謁見の間に、兄妹（きょうだい）がそろっていた。
扉から正面に向かって玉座があり、そこにドッカとフィレオ・フィッシュ公爵が腰を下ろしている。
公爵は腕を組み、瞑目（めいもく）して、兄妹の言い分を聞いている。
「どけっ！　オータム、ソード！　今度はこの私が作戦を指揮するのだ！」
「いいえ、お兄様こそおどきになって！　私がやります！」
「黙れ、この化粧女！」
「なんですって！　ゲイバーのオカマみたいなカッコして！」
「なんだと！　やるか！」
「やってさしあげますわ！」
「あん、ソードちゃんも仲間に入れて！　ソードちゃんも！」
言い争いが激しくなったとき、やおら公爵がカッと目を開けた。
「静かにせい！」
重々しい声が響く。
その声に、騒ぎは収まり、あたりは静寂に包まれ……なかった。
「あり？」
公爵はアングリと口を開けた。
「このズベ公！」
「なによ、バカオカマ！」
「言ったな！　昔、よくおもらししたくせしやがって！」
「ああ、言ってはならないことを！　あんただって肥溜めに落ちたことあったじゃないの！」
「ううっ！　人の恥部を！　このケバケバケバケバケバケバケバケバケバ……バケモノ！」
「キィィィィィィィィィィィィィッ！」
「あん、ソードちゃんも！　ソードちゃんも！」
ほとんど子供のケンカと化したゼリーとオータムの言い争いはますます激しくなる一方。
公爵の声もまるで耳に入らないようだ。

「こらっ、聞けよ、おめえら！」

「わぁぁっ！」
「きゃぁぁっ！」
ゼリーとオータムの耳元で公爵が思いっきり叫んで、ようやく言い争いは静まった。
「まったく、おまえたちときたら……」
公爵が怒りの表情で三人を見る。
ジンジンと耳鳴りする耳を押さえながら、ゼリーとオータムがシュンとなった。
「ルンルン……あれ？」
ただ一人、ソードだけがノーテンキだ。
公爵はさらに言葉を続けた。
「情けないし、ふがいない！　あまりにふが

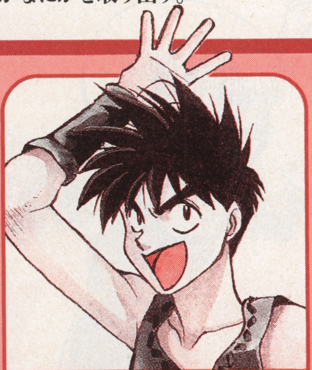




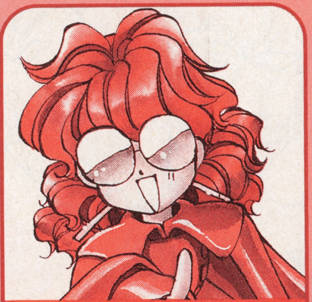
いない者は我が公爵家の後継者から外す！　子供はおまえたち以外にもいるのだぞ！」
　ゼリーとオータムの顔がサァーッと青くなる。
「まさかあいつを……！」
「エンゼルを」
　どうやら、ゼリー、オータム、ソード以外の公爵の子供はエンゼルというらしい。
「あいつはこの家を出ていった男ですぞ！」
　ゼリーが焦ったように叫んだ。
「そうですわ、父上！　エンゼルのことはもうお忘れになって……」
　オータムもこのときばかりは兄に加勢する。
　だが、公爵の険しい表情は変わらなかった。
「うるさい！　後継者はわしが決める！　おまえたちの口を出すところではない！」
　ちなみにゼリーと、オータム＆ソードの姉妹との母親は違う。義理の兄妹というわけだ。名前だけ出たエンゼルもまた、さらに別の母親から生まれていた。
　公爵は少なくとも正妻、側室合わせて三人は妻を持っていたことになる。
　精力絶倫そうだもんなぁ……。
「ともかく、世界征服だ！　世界征服を成し遂げた者こそが我が公爵家の後継者だ！」
　公爵がバッと懐からなにかを取り出した。
　それはセーラー服だ。
　背中に『落第』と文字が書かれている。
「よいか！　今度失敗した者はこの落第セーラー服を着せて廊下に立たせるからな！」
「いっ」
「だが、もし成功し、後継者になった者には……」
　さらに公爵がなにかを取り出す。
「この後継者の制服を与える！」
　それもやっぱりセーラー服で、ただ背中に『後継者』と書かれているだけだった。
　ゼリーとオータムはそれを見て、ゲンナリした顔になった。

「断じて、オータムに負けるわけにはいかん！　エンゼルなんてもってのほか！」
　自分の部屋に戻ってくるなり、ゼリーは床をドンッと踏みならした。
「ゼリー様」
　背後でゼリーを呼ぶ声がする。
「おお、ホウシ・サイザーか」
　振り向いたゼリーの前になかなかの色男が立っていた。
　裾がクルンと巻き毛になった美しい金髪が特徴的だ。
　額には法族（ソーサラー）であることを示す〝逆三角形紋様（コントラリー・トライアングル）〟がある。
「フラッシュ魔術師ホウシ・サイザーよ！

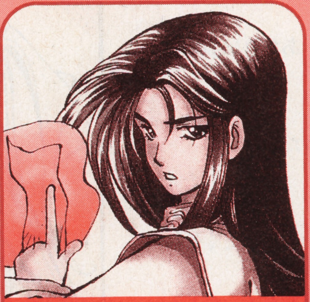
ハンターリスト



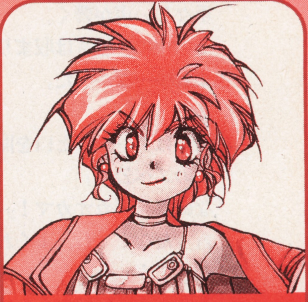
キャロット＝グラッセ
爆れつハンターのリーダーながら、その性格はご存じの通りスケベでノー天気で超お調子者。魔法を受けると牛魔獣など獣人化する。



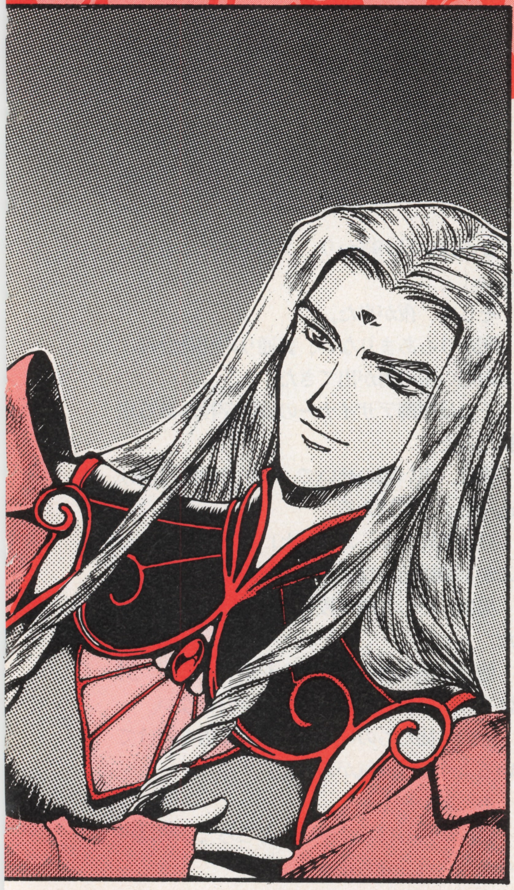
ティラ＝ミス
慈愛に満ちた眼差しが、封印を解かれたとたん、恐怖のSM女王の眼光に変わる。キャロットに密かに恋心を持っている。



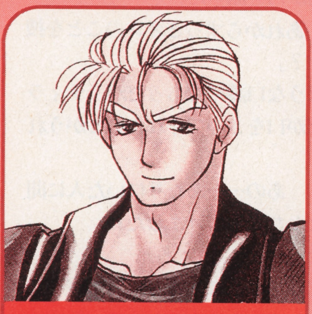
マロン＝グラッセ
東方魔術の達人にして冷静沈着、兄のキャロットとは正反対の性格である。だが、実は強度のブラザーコンプレックスでもある。



ショコラ＝ミス
好きな男には一直線！　妹のティラとはこちらも正反対の性格。しかしSM女王様化した後の怖さは、まさに姉妹！　の恐ろしさ。



おまえの力を借りるときが来たぞ！　オータムよりも先に帝都を制圧する！」
「おまかせください、ゼリー様！」
　ホウシ・サイザーはうやうやしく頭を下げた。
　果たして、フラッシュ魔術師とはいかなる術を使う法族なのか!?
　この男の実力は!?　……もうちょっと待てぇい！



ガトー＝モカ

美に対する執着は、まさに病的。おのが肉体にもそれを求め、結果的に、物理攻撃としては究極の肉体を手に入れた法族狩り。

3

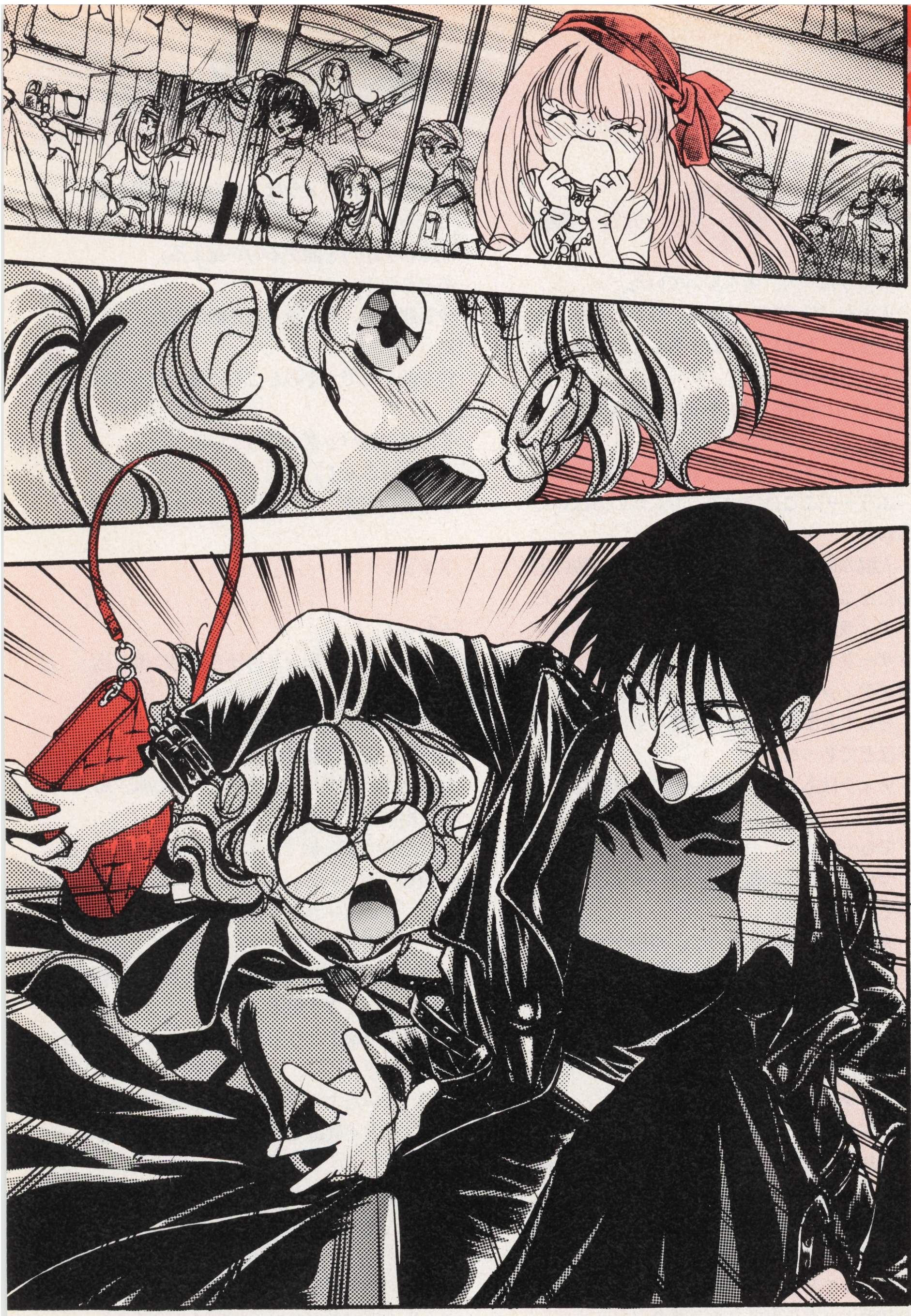
　ティラは一人、街を歩いていた。
　大きな〝仕事〟が終わり、ひさしぶりの休みだった。たまには女の子らしくショッピングというわけだ。
（ちょっと着飾って、キャロに見せてみようかな）
　ふと、ティラはそんな気になったのだ。
「ふう……ここはいつ来ても人がいっぱいですわ」
　人混みにもまれ、少しその流れから抜け出したところでティラはタメ息混じりに言った。
　ティラのやってきたベルサー街は、帝都ファザードでも有名なファッション街だ。大きなブティックがいくつも軒を連ねている。
　そして人混みの凄さは帝都でも一、二を争うほどであった。
　ティラはあまり人の多いところは得意ではない。
「でも……」
　今日ばかりは我慢、我慢——ティラは心の中でつぶやいた。
　流行の発信源ともあって、奇抜なファッションの若者たちが往来を多数行き来している。
　そんな若者に混じって、ティラはウインドウショッピングを楽しんでいた。
「色はどうしようかしら……う〜ん……」
　ティラの一番好きな色は赤だ。
　いつものコートも真っ赤。
　けれど、このときはいつもとは違う色を選びたかった。
「白かな……ピンクかな……薄い黄色なんかも……」
　そんなことを考えながら、ティラが四軒目のブティックを出てきたときだ。

「きゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」

　往来の向こうで悲鳴が響く。
「えっ!?」
　なにごとかとティラがそちらを見ると、道に一人の女の子が座り込んでいる。
「ドロボーよ！　だれか捕まえてーっ！」
　女の子から少し離れたところを黒い服の男が走っていく。
「あれがドロボーさんですわね！」
　持ち前の正義感からか、いても立ってもいられなくなったティラは、その黒服の男を追って走った。
　黒服の男が角を曲がるのが見える。
「あそこね！」
　少し遅れて、ティラも角を曲がった。
「あっ！」
　角を曲がってすぐのところに男が立っていた。
　手には赤いバッグを持っている。
「ドロボーさん！」
　ティラは果敢にその男にタックルをした。

　ドテッ！

「うわっ！」
　勢いついて、ティラと男はその場に倒れ込んだ。
　男の顔がティラの目に飛び込んでくる。
　黒い短い髪で、鋭い目つきの持ち主である。
　耳には赤いピアスをしていて、白い肌、黒い髪と相まって、よく目立った。
　さらに額には法族であることを示す〝逆三角形紋様〟がついている。
「さあ、ドロボーさん、覚悟なさい！」
　ティラは男に馬乗りになって叫んだ。
「あなたも法族のくせにこんなことして、恥ずかしくないんですか！」
　が、男の反応がどうも変だ。
「あん……!?」
　一瞬、驚いたような表情をしたが、そのあとはムスッと不機嫌そうな表情で、ティラを見ている。
　抵抗しようともしない。
　そこへ、先ほどの悲鳴と同じ声が響いてきた。
「あたしのバッグ！　あたしの！」
　ようやく被害者の女の子が駆けつけて来たのだ。
「あっ！」
　女の子は男の手にあったバッグを見て、うれしそうな顔をする。
　すると男は、倒れたまま、そのバッグを女の子にポンッと投げたではないか。
「えっ!?」
　バッグは見事に女の子の手の中に入った。
「ありがとうございます」
　女の子はティラの下にいる男に深々と頭を下げた。
「えっ？　えっ？」



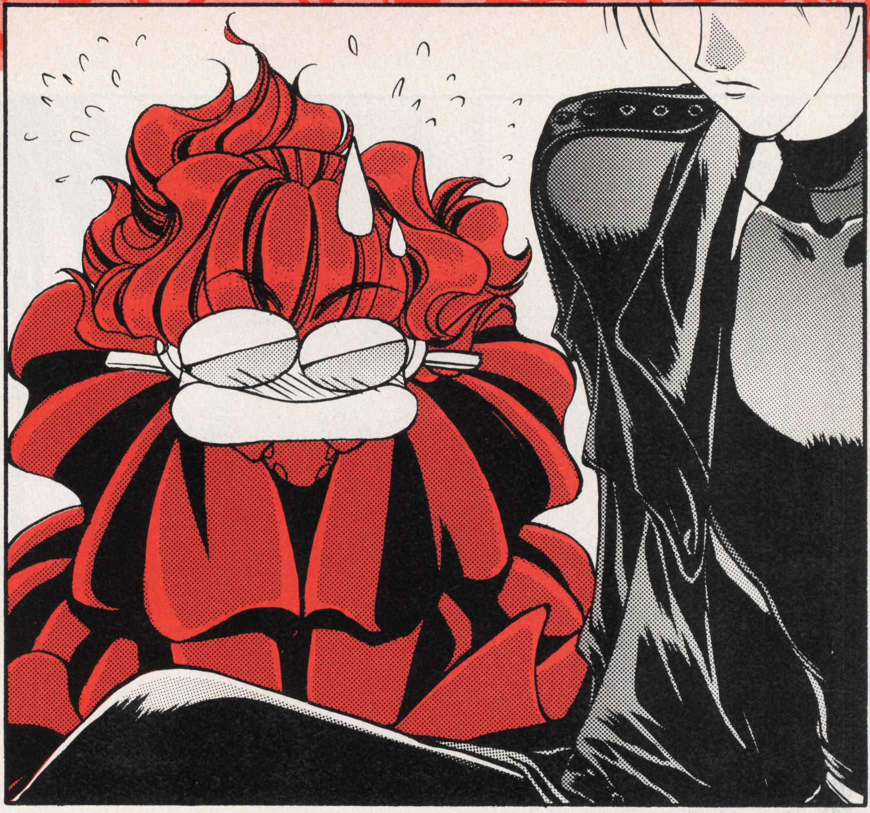
ティラが唖然と、頭を下げている女の子と自分の下にいる男を見比べた。
「あ、あの……この人……？」
ティラが恐る恐る女の子に聞く。
「この方はあたしのバッグを奪った引ったくりを追いかけてくださったんです」
よく見れば、ティラと男から少し離れたところに、いかにもチンピラといった姿の男が、目を回して倒れていた。
「あっと……えっと……ごめんなさい！」
ティラは慌てて男からどくと、地面を額で叩きそうな勢いで頭を下げた。
「ごめんなさい。あたし、てっきり勘違いして！　ごめんなさい！」
必死に頭を下げるティラを前にして、男は起きあがり、パンパンとホコリを払うと、そのままなにも言わずにその場を歩き去った。
「あれ……？」
ティラが頭を上げたとき、路地に入ったのか、男の姿はすっかり見えなくなってしまっていた。

4

夏の長い日が終わり、夕闇があたりを包み込む。
そして、夜が来た。
明かりもあまりない、裏通りの建物から、あの黒い服の男が出てきた。
そこは服飾デザイナーの養成学校がある建物だった。
男は、黒い服のせいで、まわりの闇に溶け込んだように見える。
昼間と同じく、ムスッと口をつぐんで、どこか不機嫌そうな表情をしていた。
男は、その養成学校に通っているようだった。
他にも何人かの生徒たちが出てくるが、男はそのだれにもあいさつしようとしない。
他の生徒たちのほうも、どこか男を避けているような雰囲気があった。
「あ、あの〜！」
学校からしばらく歩いたところで、男は声をかけられ、立ち止まった。
声の主は——ティラであった。
「…………」
男は表情を変えずティラを一瞥(いちべつ)すると、ふたたび歩きだそうとする。
ティラは慌てて男の前に走っていって、頭を下げた。
「ごめんなさい！　本当にあたし、ドジで。ともかくきっちりあやまりたかったんです」
「…………」
男は無言のままティラを見つめた。
ティラも顔を上げて、すまなさそうな表情で男を見る。
やがて、男が口を開いた。
「あんた……あれからずっとオレのことを捜していたのか？」
ぶっきらぼうな口調ではあったが、ティラはともかく男が口をきいてくれたことがうれしかった。
「は、はい！　あの……あたりにいた人に聞いて、なんとかたどり着けましたわ」
「あきれたぜ……」
わずかに驚きを表情に出して、男は言った。
「でも、どうしてもあやまりたくて。無実の人を犯人扱いしてしまったんですもの」
法族狩り(ソーサラーハンター)であるティラは、罪というものに関して、考え方が相当ナーバスになってい

た。
　いくら単純な勘違いとはいえ、無実の人間を犯人と間違え、しかもなじってしまった自分が、ティラにはどうにも許せなかったのだ。
　ティラが何時間もかけて男を捜したのは、一つには自分自身への戒めの意味もあった。
「別に怒ってないぜ。間違えられるのは慣れてる……」
　男はまたもぶっきらぼうに、そう言った。
　どうやら、彼はその必要以上の眼光の鋭さや、そのぶっきらぼうな口ぶりで、いろいろトラブルを引き起こしているらしかった。
「いつも悪に見られるのさ」
「あ、そんなことは……」
「いいさ。悪だから」
「そ、そんなことはないと思いますわ！」
「あん……!?」
「ほとんど初対面の人にこんなこと言うのもなんですけど、人間、見かけはぜんぜん関係ありません！　確かにあなたは目つきは悪いし、口調もぶっきらぼうですけど、悪い人じゃないと思います！　現にあなたはバッグを盗られた女の人のためにドロボーを捕まえたじゃありませんか！」
　ティラは一気にしゃべり切った。
　自分を低く見せようとする男の態度が、ティラはなんとなくいやだったのだ。
「オレは……」
　男はティラの目をじっと見つめ、なにかを言いかけた。
　そこへ——

「きゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」

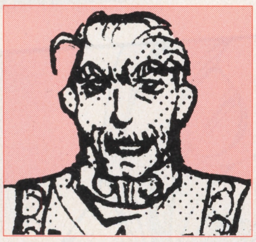


「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」

　表通りからいくつもの悲鳴が聞こえてくる。
「なんですの!?」
「…………!?」
　いつの間にか、ティラと男は駆け出していた。
　表通りに出てみると、
「えっ!?」
　驚いたことに人々がバタバタと倒れているではないか。
「大丈夫ですか！」
　ティラはそばに倒れていた女を抱き起こした。
「目が……目が……」
　女は目を開けられないらしく、必死で手でまぶたをさわっていた。
　他の倒れている者たちも同じらしい。
　いずれも目が見えなくなってしまっているのだ。
「いったいこれは……!?」
　そのとき、前方から声が響いてきた。

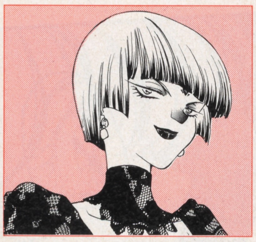
WANTED!

フィレオ・フィッシュ



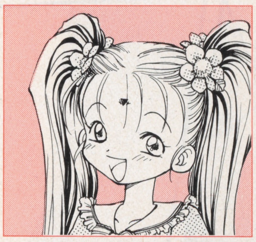
悪の法族「フィッシュ一族」の総帥。制服マニアがこうじて世界征服までもくろむおマヌケなオヤジ。正体、実力のほどはまだ不明。

オータム・フィッシュ



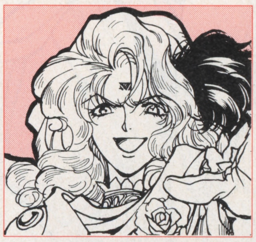
フィッシュ一族の長女。ケバケバな容姿と酷薄な性格はまさに悪の女帝。異母兄のゼリーと、一族の後継者をめぐって対立している。

ソード・フィッシュ

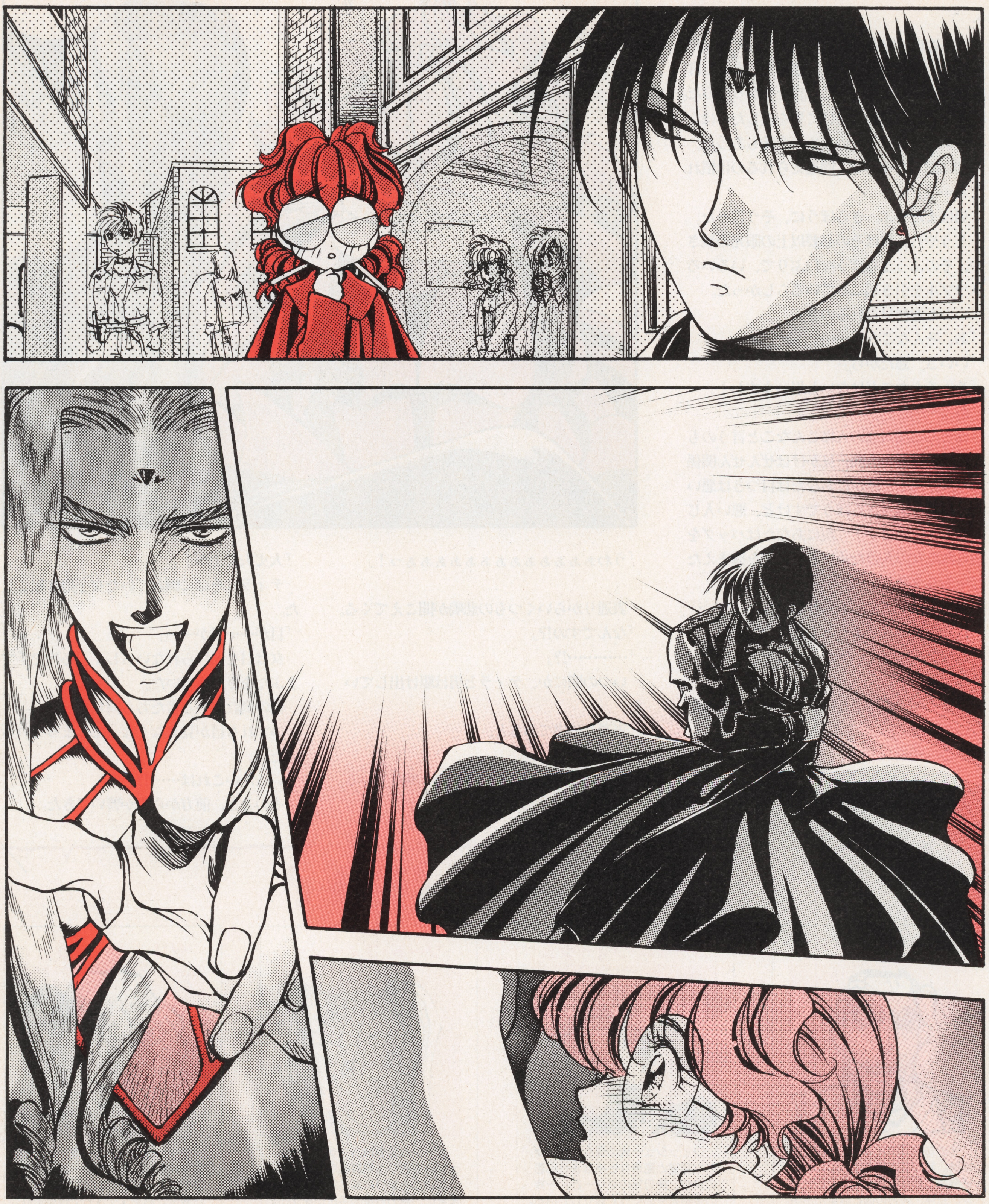


オータムの実妹。コケティッシュな容姿通り小悪魔的な性格。ニコニコとあまり意味もわからないままに、悪の野望の手伝いをする。

ゼリー・フィッシュ



フィッシュ一族の長男。一見オカマ的だが、性格もやっぱり陰険、自分勝手、無責任と三拍子そろった悪役。おマヌケさも父親ゆずり。



爆れつ場外乱暴!!

「爆れつハンター＝お下劣反対！…PS．いや…別に私は反対じゃないのですが…。」（奈良県・グレムリン）　後半の追伸の弱気が気になるぞ〜!!　駄洒落は人の目、人の気持ちを考えていたら通用せん！　編集の追及、奥さんの追跡を振り切ってでも夜遊びするぐらいの気合いがなければならぬのだ!!

「フフフ……我はフィッシュ一族のホウシ・サイザー！　我らフィッシュ一族の恐ろしさを知るがよい！」

声はティラと黒服の男のもとに向かってくる。

二人の前に現れたのは、金髪巻き毛の法族(ソーサラー)──あのフラッシュ魔術師ホウシ・サイザーだった。

とっさに男がティラを引き寄せて、自分の服の中にティラを抱き込んだ。

「えっ!?」

「目を開けるな！」

ピカァァァァァァァァァァァァァァッ！

凄まじい光量が出現する。

「きゃっ！」

目を閉じていても、その光量を感じることができた。

これはまともに見たらひとたまりもない。

男の黒い服がなく、目を閉じただけだったら、かなりの影響を受けただろう。

ティラがやっと目を開けると、ホウシ・サイザーが苛立ったような表情で二人をにらみつけている。

「おのれ！　我が魔法を防ぐとは！」

だが、ホウシ・サイザーは黒服の男の顔を見た途端、表情が変わった。

「あ、あなたは……！」

「…………」

男はジロッとホウシ・サイザーをにらみつける。

「し、失礼しました！」

ホウシ・サイザーは慌てて、その場を一目散に走り去った。

「い、いったいなんなんですの!?」

わけがわからないといった顔で、ティラは男を見た。

そのときになってティラは、自分がまだ男の腕の中にいることに気がついた。

「き、きゃあ！」

「えっ!?」

悲鳴をあげて、ティラが男から離れる。

そのまま気恥ずかしそうな表情で男を見た。

たとえ成り行きとはいえ、男に腕で抱かれたことなどほとんどないティラであった。

男のほうは唖然とした表情でティラを見つめている。

やがて、男の口からある言葉が飛び出した。

「すまん……」

男は見かけによらず素直にあやまったのだ。

「あ……!?　そ、そんな、別にあやまってもらうようなことをされたわけでは……」

ティラが慌ててなにか言おうとするが、それよりも先に男が言った。

「あんた、赤もいいけど、少ししつこいかもな……。今度は白い服を着てみな」

「えっ!?」

男はそれだけ言うと、呆然と立っているティラを残して歩き出した。

やがて、闇の中に消えていくかのように男の姿が見えなくなる。

「変わった男(ひと)……」

完全に男の姿が消えた後で、ティラのつぶやきがもれた。

5

「フィッシュ一族の新たな魔術師(ソーサラー)をなんとかしなさい」

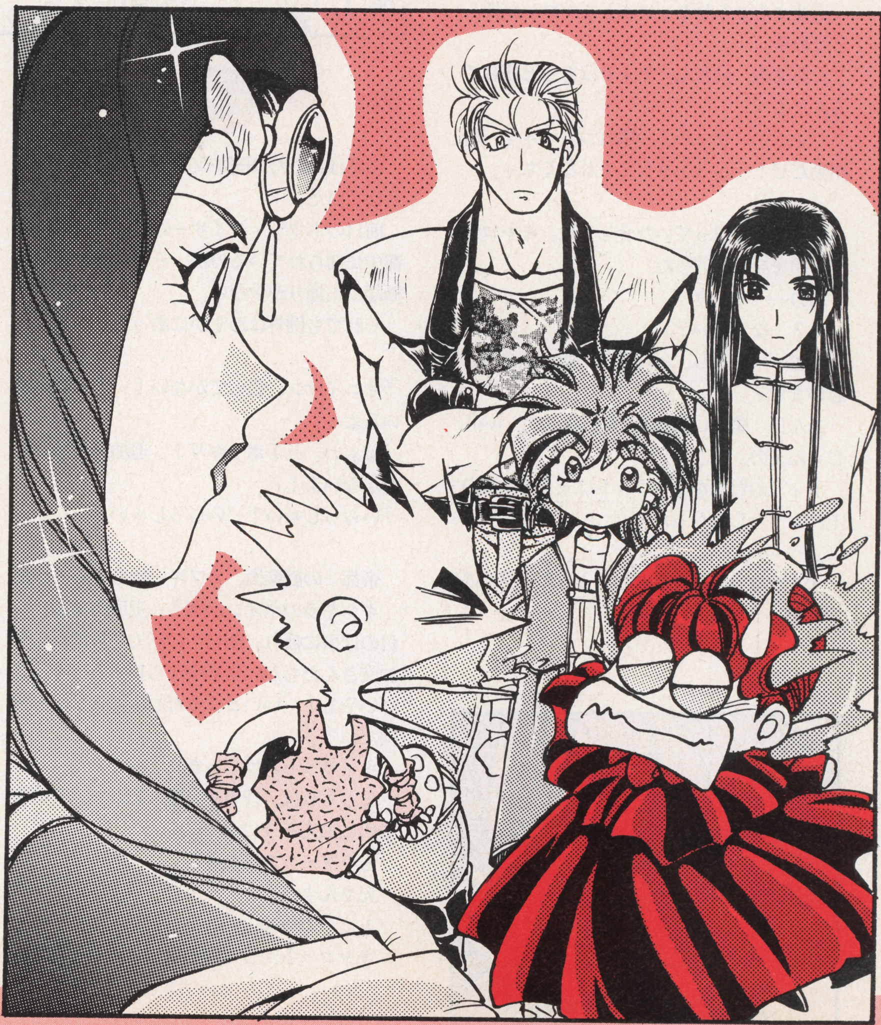
翌日、フラッシュ魔術師ホウシ・サイザーの被害が無視できないほどの人数に到達したことがわかると、マムから指令が下った。

このままでは帝都中の人間が目をやられて、経済が麻痺しかねない事態に追い込まれていたのだ。

もちろん、敵の狙いもそこだった。

「ふはははははははははははははははっ！　今回こそ、ちゃんとしたオシオキ戦隊爆れつファイヤーの出番だぜ！」

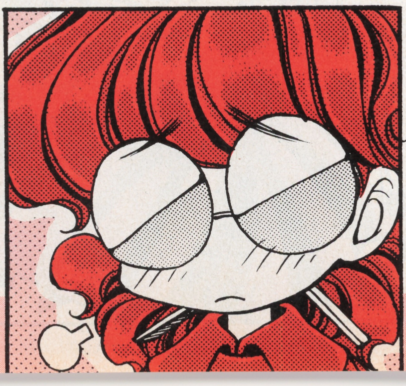
一人、元気満タンのキャロットに対して、あいかわらず残りのメンバーは乗り気でなかった。

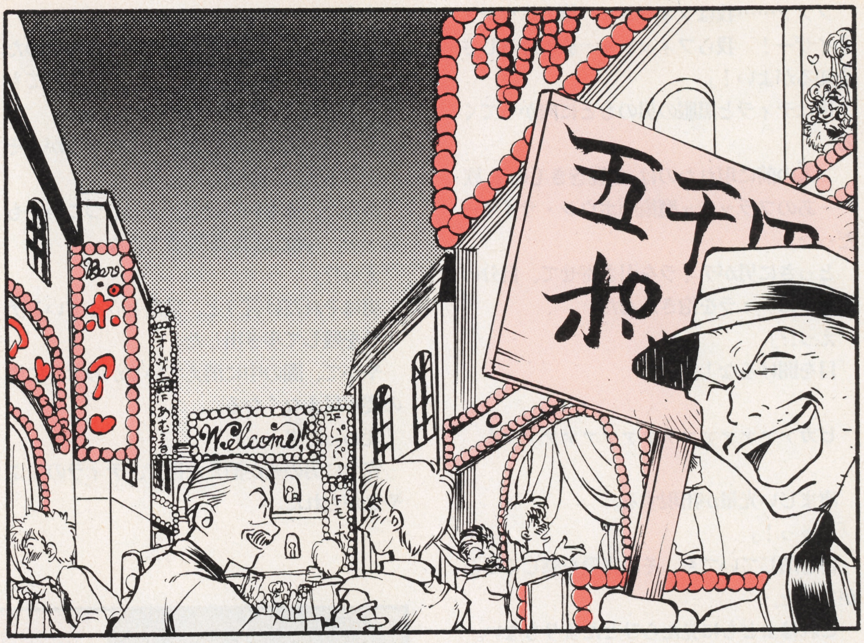


中でも、ティラはなにかに気を取られたようにボーッとしてる。
「ティラ、どうした？」
「…………」
「おい、ティラ！」
「…………」

「ティラ！」

「きゃっ！」
耳元での鼓膜がやぶれるんじゃないかと思えるほどのキャロットの大声で、ようやくティラが覚醒した。
「なんだよ、ティラ？　昨日、街から帰ってから、おまえ変だよ」
「あ、いえいえ……決してそんなことはありませんわ」
「だって変なんだもん」
「…………」
追及するようなキャロットをマロンが押しとどめる。
「まあまあ、兄さん。ティラはきっと疲れてるんだよ」
「ちぇっ！　せっかくの爆れつファイヤーの出動だぜ！　しっかりしてくれなくちゃ」
「…………」
なにごとか思っていたティラは、キャロットの顔を見て、言った。
「あの……キャロ」
「ん？　なんだい？」
「あの……あたし、どんな色の服が似合うと思います？」
「あん!?　服？　服なんていつものでいいんじゃねえの」
ティラの質問をキャロットはまともに取り上げようとしなかった。
「ふう……」
ティラは少しガッカリしたようにタメ息をついた。





6

帝都はふたたび闇が支配する時間帯へと突入していた。
前日のホウシ・サイザーの脅威はすでに帝都中に知られているのか、その夜はどこでも極端に人通りが少ない。
それでも例外はわずかにあった。

「オニイサン、寄ってかない！　かわいい娘いるよ！」
「はぁい、五千ポッキリ！　追加料金はいただかないよ！」
「いらっしゃい！　いらっしゃい！」

帝都一の歓楽街、カブキー街もその一つだ。
ギンギラのネオンが輝く、退廃的な街。一日の仕事に疲れ、明日への活力を見出したいお父さんたちが、帝都中から集まってくる。
「いやぁ！　いいところだね、ここは！　天国だね！」
キャロットははしゃぎまくっていた。
ともすれば、仕事を完璧に忘れて、そのまま店に消えそうになる。
「もうダーリンったら！」
「兄さん！」
「とに、バカが……」
キャロットがどこかの店に入りそうになるごとにショコラ、マロン、ガトーが慌てて連れ戻す。
ティラだけはそんなキャロットを少し複雑な表情で見つめていた。
（キャロってば……）
さっき、服の色の質問にちゃんと答えてくれなかったことがまだ不満なのだ。
（キャロにとって、あたしってなんなのかしら？）
ふいに浮かんだその疑問は、前に同じことを思ったときよりも、ずっと否定的だった。
キャロにとって、あたしはどうでもいい存在なんだ――
そんなニュアンスが多分に入っていた。
「ティラ」
マロンが心配そうに、近づいてきて声をかけた。
「どうしたんだい、ティラ。今日は少しおかしいよ」
「えっ!?　ううん、なんでもないんですの」
「なんか悩み事があったら聞くけど」
「大丈夫ですわ……ホントに。なんにも悩みなんてないですわ」
「……兄さんのことで、なにかあったの？」
（ドキッ！）
マロンの鋭い指摘にティラの心臓は思わず大きく弾ける。
「べ、別に……」
さらに突っ込まれたら、とても誤魔化し切

れない――というとき、それは起こった。

フッ……

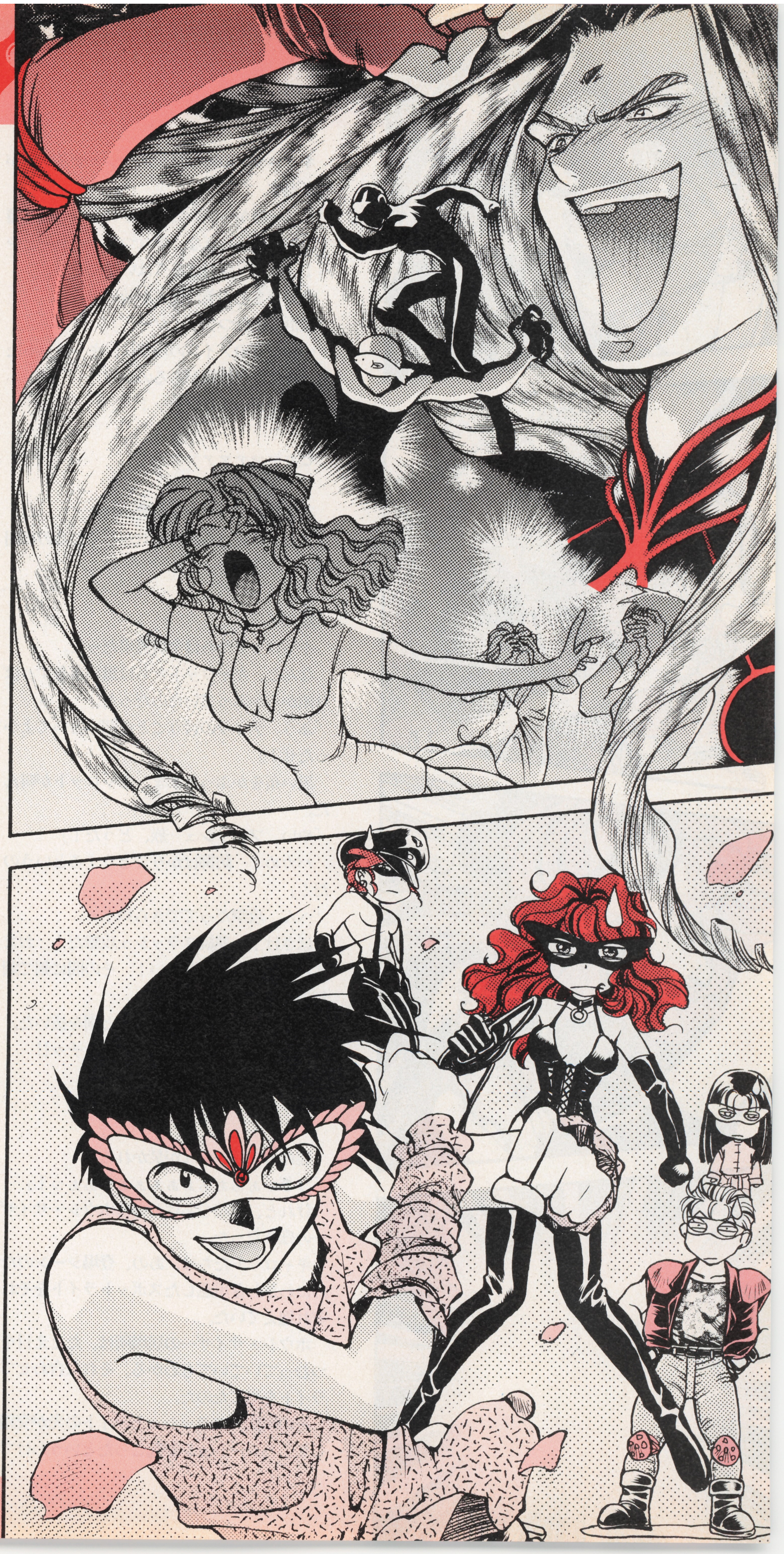
いきなり、カブキー街中のネオンが消えたのだ。
あたりは真っ暗に。
「なんだ、なんだ!?」
人々が騒ぎ始めたとき、あちこちでいくつもの閃光が輝いた。
「きゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」
「うわぁぁぁぁぁぁっ！」

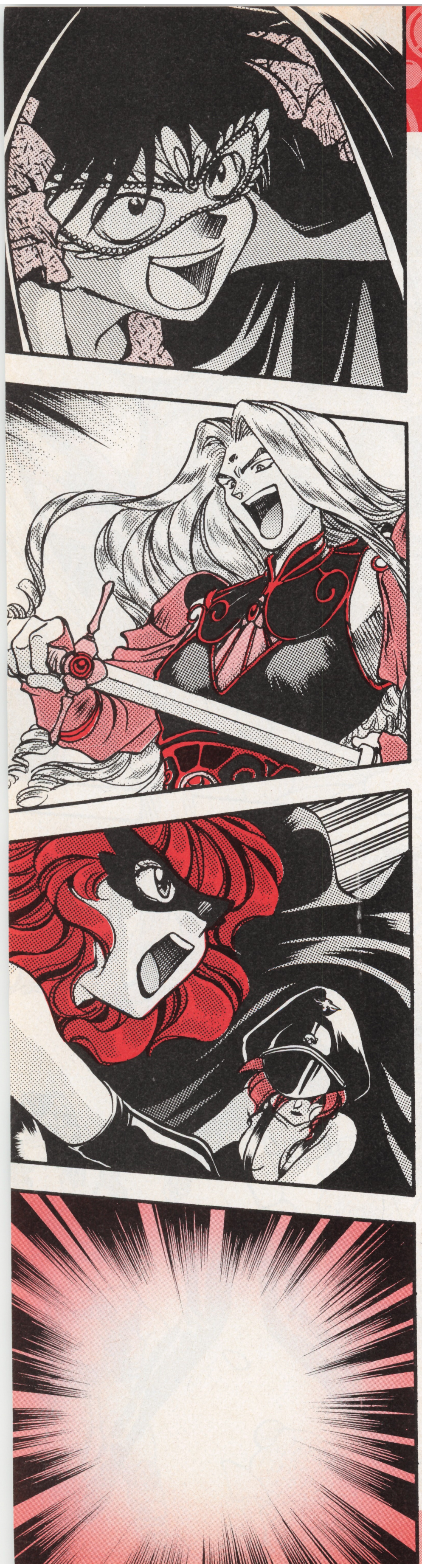
悲鳴がいくつも交錯する。
にらんだとおり、ホウシ・サイザーが現れたのだ。
「ふははははははははははははっ！　我らフィッシュ一族の恐ろしさを知れッ！」
タイやヒラメのお面をつけた戦闘員たちが明かりを見つければ消してまわり、とどめはホウシ・サイザーのフラッシュであった。

ピカッ！

「うきゃぁぁっ！」
被害はますます広がっていく。
そのときだ！
「そこまでだ、フィッシュ一族！」
「なにっ!?」
チャラッラァ～チャラララ～～♪

ご丁寧にもテーマ曲がかかり（このためにわざわざキャロットが用意した)、スポットライトの中（これもわざわざキャロットが用意した)、現れたのは五人の戦士！
「我ら、オシオキ戦隊爆れつファイヤー！」
さっそうと、キメポーズ！
ただし、キャロット一人だけ。
あいかわらず他の四人はやる気なし。
「このノリだけはついていけねえぜ」
「ホント……」
ガトーのつぶやきにみんながうなずいた。
「おまえらなぁ！」
「兄さん、怒るよりも敵を！」
「ああ、そうだった！　やいやいやい、フィッシュ一族！　おめえらの悪事もここまでだぜ！」





キャロットの叫びに、ホウシ・サイザーが叫び返す。
「ゼリー様から聞いておるぞ!! いつも邪魔するのは貴様らだな、爆れつファイヤーとやら！ だが、今日はそうはいかんぞ！」
金髪巻き毛の美形怪人が前に出る。
「覚悟、爆れつファイヤー！」
いきなりのメインの攻撃に、キャロットたちはなにか対抗策があるのか!?
絶体絶命の大ピンチッ！

ビカァァァァァァァッ！

凄まじいフラッシュが焚かれた。
まともに見たら、目がおかしくなるのは間違いない！
だが——
「なにっ!?」
キャロットたちは全員無事だった。
なんと、キャロットたちは黒い布をすっぽり頭からかぶっていたのだった。
「ふう。ティラの言うことを聞いといてよかったぜ！」
黒い布をかぶったまま、キャロットが叫んだ。
「やい、フィッシュ一族、どうだ！」
「バカめ！ 防御ばかりでどうするというのだ！」
「へん、攻撃だってできらい！」
「ほざけ！ 連続フラッシュ攻撃だ！ おまえらは身動きがとれまい！ その間に剣で刺し殺してやる！」
ホウシ・サイザーがすらりと剣を抜いた。
今度こそ、絶体絶命の大大ピンチッ!!

ビカァァァァァァァァァァァッ！

運命のフラッシュが焚かれた。
「うぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」
けれど、悲鳴をあげたのはホウシ・サイザーのほうだった。
キャロットたちは、あの、登場シーンのためにわざわざ用意したスポットライトをそれぞれ抱えていた。
ホウシ・サイザーの居場所は、たとえ目をつむっていていてもわかる。それに合わせてライトを当てたのだ。
その瞬間、フラッシュとライトの光が交錯して、ハレーションが起こったというわけである。
「うぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」
ハレーションで目をやられ、ホウシ・サイザーが地面でのたうち回っている。
しかも、新たな事実が——
「あっ、これは！」
地面に金髪巻き毛が落っこちている。
なんと、あの金髪巻き毛はかつらだったのだ。
「こいつ、ツルピカでやんの！」
光沢を放つ見事なハゲ頭が、あのフラッシュの正体であった。
「それっ！」

ドカッ！ バキッ！ グシャッ！

「うがががが……」
全員がいっせいに飛びかかって、哀れ、ホウシ・サイザーはズタボロに。
しかも、頭部はマジックで落書きだらけになっていた。
あっけない勝利——

かくして、フラッシュ魔術師ホウシ・サイザーの脅威は帝都から去った。だが、フィッシュ一族がこれで壊滅したわけではない！ がんばれ、キャロット！ 負けるな、ボクらのオシオキ戦隊・爆れつファイヤー！

「正義は勝つ！」
他の四人が呆れる中、ただ一人勝利のポーズをとるキャロットであった。



7

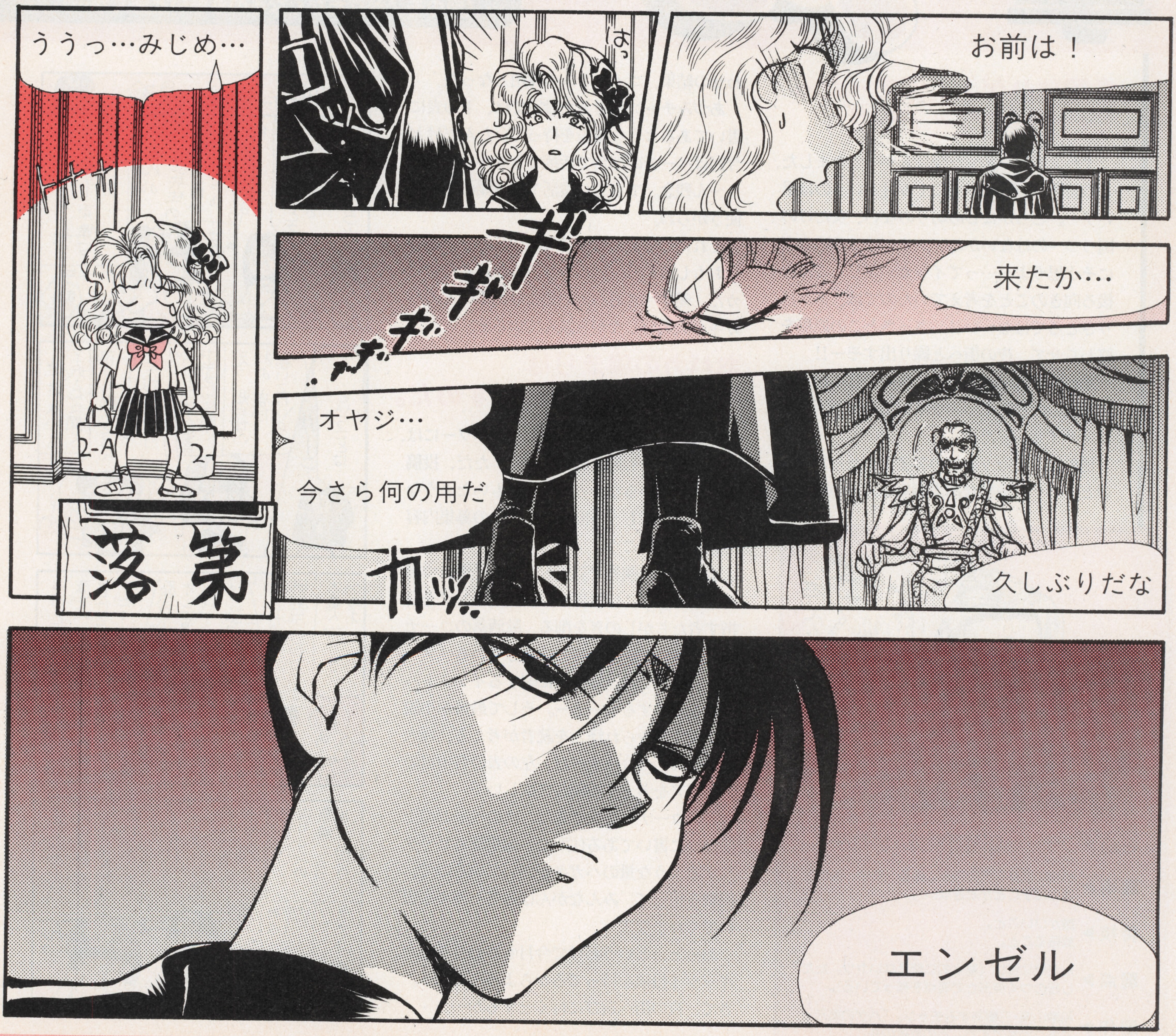
「ううっ……みじめ……」
『落第』と書かれたセーラー服を着せられ、しかも両手に水の入ったバケツを持たされて、ゼリー・フィッシュが謁見の間の前の廊下に立たされていた。
ホウシ・サイザーが敗れたため、上司であるゼリーが責任をとらされたというわけだ。
そこへ、一人の男が通りかかる。
「おまえは！」
男を見て、ゼリーの顔色が変わった。

謁見の間の玉座には、フィレオ・フィッシュが座って、静かに瞑目していた。

ギギギギギ……

「来たか……」
ドアの開く音とともに目を開ける。
フィレオの前に立っていたのは、黒い服の男だ。
耳には赤いピアスをつけている。
そう、ティラと出逢った彼だった。
「オヤジ……今さら何の用だ」
彼はぶっきらぼうに言い放った。
「ひさしぶりだな、エンゼル」
そう、彼こそがフィッシュ一族の一人、エンゼル・フィッシュであったのだ。

≪続く≫



MONTHLY DENGEKI BOMB!

月刊 電撃爆



小説「爆れつSP」も、今回で3回目。ということは、この"電撃爆"も3回目ということだ（あたりまえだってーの!!）。まったく月日の経つのは早いものよのう…（別のモノが立たなくなるのも早いと聞くが…）。

今回はハゲ！　何てったってハゲはコワイぞ〜!!

すわぁて！　ま〜た今月もやってきました、この時間。いやー本当に1カ月というのは早いワ…。どっかにしめ切りのない、女だけの国っつ〜のはないかねぇ。オレはこの頃本当にそう思うよ……ってイッカ〜ン!!　こんな後ろ向きのことを考えていたのでは、あかほりさとるではな〜い!!　さっさとこの原稿を終わらせて、夜の街へと繰り出すぞー!!

すわぁて!!（シツコイ）今回の登場怪人は、和歌山県の三樹あづみチャンの考えた、「ホウシ・サイザー」だ。

他の怪人とセットでのアイデアだったんだけど、ハゲに敏感な担当編集さんとの打ち合わせの結果、コイツのみの採用となった。

あづみチャンの考えた設定では、下の表に書いてあるような魔術を持っていたんだけど、今回はページの都合で活躍できなかったのだ、う〜ん残念。でももし復活での登場のときは使うからね。

それにしても、この「爆れつSP」の読者はおもしろい!!　はっきり言うがみんなおバカだ。愛すべきおバカの集まりだ！　どのハガキも大笑いしながら読んでいるぞ。

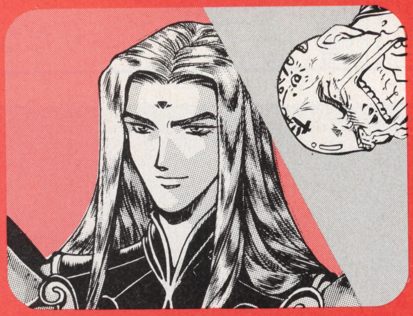
おバカの集まりは究極の小説を生み出すのだ。

まったく爆れつファンのおバカパワーには、さすがのオレも押され気味だぜ。ただ、投稿の方法がわからなかったファンもいたようなので、ここでもう一度各コーナーの募集内容を紹介しておこう。

まず、小説欄外で募集している「爆れつ場外乱暴!!」。ここは世界一の駄洒落キングを目指す者たちがしのぎを削る、駄洒落のコーナーだ。次に右のページで紹介している「メールオブ爆」。これは爆れつに関するイラストハガキを募集するコーナー。そして最後が小説に登場するやられ怪人を読者が考える、「怪人すぐ帰れ」のコーナーだ。左の表の各項目のアイデアを考えて投稿して欲しい。

どのコーナーも宛て先は、次のページの下部欄外に書いてある住所だ。編集部もビックリするような量のハガキが届いているので、掲載を狙って、みんながんばってハガキを書いてくれよな！

おっと、というわけで今月も終わりそうだ。キッツイ投稿を待ってるからよろしくね〜。さて、夜の街へ遊びに行くとするか…。



名前	フラッシュ魔術師「ホウシ・サイザー」
魔術	植物の成長を自由自在に操る（でも、髪の毛はのばすことができない）。
特技	顔がいいこと。威張ること。
弱点	ただ単に弱い（基本的に使えないヤツ。ただし超のつく美形さで弱点を補っている）。
制作	和歌山県・三樹あずみチャン。「ハゲの美形ってありがちですね」との反省の弁。



TOPICS

究極のCD、「あぶらみブラザーズ・赤」録音終了、制作快調!!

某月某日、都内のあるスタジオに、そろりそろりと集まった売れっ子声優たち。そう、この日は恐ろしくも待ち遠しい、あかほりさとる制作のスーパードラマCD、「あぶらみブラザーズ・赤」の録音日だったのだ。このCD、ギャグ満載、エッチ満載、その上○○○が×××でアレがナニして腰の抜けるという、超とんでもない内容なのだ。各方面（いったいどんな方面だかな〜）の妨害を恐れて、発売ギリギリまで詳しく紹介できないが、そこはそれ、なんでもありのこのページ、トーゼン来月号で、じっくりしっかり特報してしまうつもりなので、読者のみなさんは、お楽しみに。



◀出演声優さんはこれだけじゃない!! 次号を心して待て。

メール オブ 爆

毎月力作を送ってくれてありがとう!! このページは2色のページだから戸惑った人もいたようだけど、モノクロでもカラーでも、気にしないで送ってください。

もちろん文章だけのハガキでもいいよ。それじゃあ来月も待ってまーす!!



◀静岡県・R、篠北
自分のタッチが出ててとてもいいね。



▲神奈川県・きさらぎりあ
さてこの3人、どうなることやら。



▲北海道・高都むう
知的なティラ＝ミス、なかなかだね。



▲群馬県・星あゆみ
「やっぱりマロン」とのこと。マロン強し!!

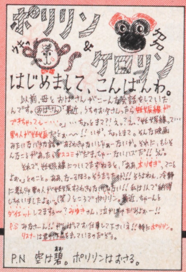
スペシャルリンクス

あかほりさとる のわぁんちゃって 森永 おかしの森シアター SAY YOU! JOQR 出張版

ついに番組本も発売され、もう手元に持っている人も、多いんじゃないかな。どんどん広がる本家「〜SAY YOU!」に負けず、今月もいってみよう。

とんでもない表紙の とんでもない本が発売!!

もう何人かは、本屋で腰の抜けた人がいるんじゃないかな？ そう、ついに出てしまったんですよ、この「〜SAY YOU!」の番組本が。



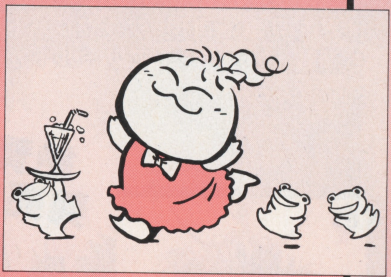
まさにオチャラケって感じの表紙のこの本。もちろん爆れつのコーナー、そして番組の再録と、盛りだくさんの内容となってます。ぜひ御一読くださいませ。

◀東京都・空は蒼ポリリンは〜
最近はカラフルなハガキも多い。

さて、あいかわらず好調のこの番組。そのパーソナリティの一人、本誌「ケロ通」でもおなじみの、水谷優子さんのエッセイ集の発売日も、8月31日と決定まりました。なんと表紙＆イラストは、花摘香里さんが担当。こちらもよろしくね。



▲埼玉県・めげるな〜
タテになっちゃってゴメンね。

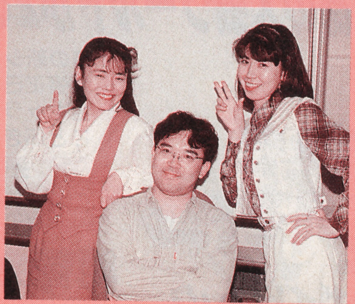


▶水谷さんのエッセイ集のイラスト。もちろん本チャンでは、カラーイラストになります。

まさに敵なしレ!! 破竹の番組はどこに行く!?

先月今月と紹介のように、電波外にも進出著しいこの番組。はたしてどこまで広がるのか推測できないほどになってきちゃってます。

もちろんポリリン、ケロリンの、人気パーソナリティの力によるところも大きいんだけど、右で紹介のパソコンネットなど、今までのラジオでは考えられないメディアへの展開には、どうやら秘密がありそう。次号のこのページでは、そのあたりを、番組の裏方さんを取材することで明らかにしてみようと思います。はたしてどんな人が飛び出してくるのやら…。乞うご期待!!



ニフティ内 爆れつルーム

昨年12月に開設されたこの番組の会議室。あまりの反響の大きさに、ついに文化放送の他のアニメ番組も合わせて、アニメ番組フォーラムを開くことになってしまったのだ!! AMラジオとして、こんなに大々的にパソ通にフォーラムを開設するのは史上初のことなのだ!!

7月6日より新たにスタートした「新のわぁんちゃって会議室」。再びのパンクを目指してガンガン書き込んでくれ!! コマンドは「FQR」でアクセスするぞ。

おたよりのあて先：〒101 東京都千代田区 神田駿河台1−8 東京ＹＷＣＡ会館 電撃ＰＣエンジン編集部爆れつ○○係


DENGEKI BUNKO EX
衝撃プライス1,980円！超人気タイトルが毎月25日にゾクゾク発売されるゾ。
目覚めよ、闇の闘士たち。
闇の支配者オゾムを失い、本能を呼び覚まされた闘士（ダークストーカーズ）たちは、
今自らの歴史をかけ壮絶な戦いに挑む…。
超人気を誇った『ヴァンパイア』のオリジナルストーリーがついに
CDドラマで登場だっ！
絶賛発売中
VAMPIRE The Night Warriors
ヴァンパイア
～ザナイト ウォーリアーズ～
大塚明夫をはじめ冬馬由美、置鮎龍太郎など超人気声優陣が、作品
世界を見事に再現。ブックレットにはキャラクター＆ストーリー紹介
も満載。ヴァンパイアワールドがとことん楽しめるスグレモノだぞ。
©1994 CAPCOM
税込価格1,980円
絶賛発売中
エメラルドドラゴン
SFCゲームミュージックアルバム
スーパーファミコン版『エメドラ』のゲームミュージックを完全収録。さらにブックレットには木村明広のイラストによるキャラクター紹介を掲載。まさにすべてのエメドラファン必携アイテムだ！
税込価格1,980円
©メディアワークス ©グローディア ©ライトスタッフ
8月にでるぞ！第2弾はコレだ！
電撃コミックガオ！で連載され不動の人気を誇った麻宮騎亜の名作が、イメージアルバムで甦る。円谷憂子、影山ヒロノブら一流アーティスト参加の超豪華版。ブックレットでは単行本未収録の「メビウスクライン～月の石編」が楽しめるぞ。
8月25日発売予定 予価3,800円
イメージサウンドトラック
メビウスクラインII～胎動
© KIA ASAMIYA ／Media Works
電撃ムック
話題超独占！あの大張ワールドが200%楽しめるスーパーな1冊。
● 噂の新システム『必殺技トレースシステム』を公開！
● 大張正己ロングインタビュー！
● 全キャラクター徹底紹介ほか未公開データを満載！
● ことぶき つかさの熱血コミック収録！
特別付録 オリジナルCDV
大張正己監督のプロモーションアニメ収録！
CD／CDV／LDプレーヤーで再生して下さい。
超人学園ゴウカイザー
オフィシャルガイドブック
絶賛発売中 定価1,980円
ILLUSTRATION／大張正己（STUDIO G-1） © 1995 TECHNOS JAPAN CORP.
※価格はすべて税込みです
発行●メディアワークス 発売●主婦の友社
お問い合せ▶03・3294・1130（主婦の友社営業部）
内容に関するご質問▶03・5281・5207（メディアワークス書籍編集部）